

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

Vol 2



安 心 ・ 快 適 そ し て ワ ク ワ ク

株式会社 くるま生活

真の豊かさ

お金で買えるものと、買えないものがある。お金で「家」は買えるけれど、「家庭」は買えない。お金で「時計」は買えるけれど、「時間」は買えない。お金で「ベッド」は買えるけれど、「快適な睡眠」は買えない。お金で「本」は買えるけれど、「知識」は買えない。お金で「名医」は買えるけれど、「健康」は買えない。お金で「地位」は買えるけれど、「尊敬」は買えない。お金で「血」は買えるけれど、「命」は買えない。お金で「セックス」は買えるけれど、「愛」は買えない。真の豊かさとは、お金ではない。

マダム・ホー

夫婦の夢

今「好きだよ」って。

十年後「君を愛してる」って。

二十年後「お前が一番だよ」って。

三十年後「アナタがいてくれてよかった」って。

四十年後「これからも一緒にね」って。

五十年後「たくさん、ありがとう」って。

六十年後「じゃあ、いこっか」って。

そういう夫婦になるのが夢。

絢乃

“子”に込められた想い。

女の子の名前でよく見る「子」という字には、ただ単に子供の「子」ではなく、「一」（はじめ）から「了」（おわり）まで、自分の人生を全うできるように。という意味が込められているそう。昔の親たちはきちんと、それを意識して明子さんなら、生涯、明るく過ごせますように、栄子さんなら、生涯、栄えますように、と名前を付けていたのかもしれませんがね。『〇〇子』という名前には、祖先の温かな気持ちと想いが、いっぱい詰まっている。なんかこう聞くと名前に愛着がわくものですね。

小玉 歩

「お母さんの宝物」

自分の目の前に子どもがいるという状況を当たり前だと思わないでほしいんです。自分が子どもを授かったこと、子どもが「ママ、大好き」と言ってまとわりついてくることは、奇跡と奇跡が重なり合ってそこに存在するのだと知ってほしいと思うんですね。そのことを知らせるために、私は死産をした一人のお母さんの話をするんです。

そのお母さんは、出産予定日の前日に胎動がないということで来院されました。急いでエコーで調べたら、すでに赤ちゃんの心臓は止まっていました。胎内で亡くなった赤ちゃんは異物に変わります。早く出さないとお母さんの体に異常が起こってきます。でも、産んでもなんの喜びもない赤ちゃんを産むのは大変なことなんです。普段なら私たち助産師は、陣痛が5時間で

も10時間でも、ずっと付き合ってお母さんの腰をさすって「頑張りい。元気な赤ちゃんに会えるから頑張りい」と励ましますが、死産をするお母さんにはかける言葉がありません。赤ちゃんが元気に生まれてきた時の分娩室は賑やかですが、死産のときは本当に静かです。しーんとした中に、お母さんの泣く声だけが響くんですよ。

そのお母さんは分娩室で胸に抱いた後「一晩抱っこして寝ていいですか」と言いました。明日にはお葬式をしないといけない。せめて今晚一晩だけでも抱っこしていたいというのです。私たちは「いいですよ」と言って、赤ちゃんにきれいな服を着せて、お母さんの部屋に連れていきました。その日の夜、看護師が様子を見に行くと、お母さんは月明かりに照らされてベッドの上に座り、子どもを抱いていました。「大丈夫ですか」と声をかけると、「いまね、この子におっぱいあげていたんですよ」と答えました。よく見ると、お母さんはじわっと零れてくるお乳を指で掬って、赤ちゃんの口元まで運んでいたのです。死産であっても、胎盤が外れた瞬間にホルモンの働きでお乳が出始めます。死産したお母さんの場合、お乳が張らないような薬を飲ませて止めますが、すぐには止まりません。そのお母さんも、赤ちゃんを抱いていたらじわっとお乳が滲んできたので、それを飲ませようとしていたのです。飲ませてあげたかったのでしょうね。死産の子であっても、お母さんにとって子どもは宝物なんです。生きている子ならなおさらです。一晩中泣きやまなかったりすると「ああ、うるさいな」と思うかもしれませ

んが、それこそ母親にとって最高に幸せなことなんですよ。母親学級でこういう話をすると、涙を流すお母さんがたくさんいます。でも、その涙は浄化の涙で、自分に授かった命を慈しもうという気持ちに変わります。

「そんな辛い思いをしながら子どもを産む人がいるのなら私も頑張ろう」

「お乳を飲ませるのは幸せなことなんだな」

と前向きになって、母性のスイッチが入るんですね。

内田美智子

わたしは無駄にこの世に生れてきたのではない。また人間として生れてきたからには無駄にこの世を過ごしたくはない。私がこの世に生れてきたのは、私でなければできない仕事が何か一つこの世にあるからなのだ。それが社会的に高いか低い、そんなことは問題ではない。その仕事は何であるかを見つけ、そのために精一杯の魂を打ち込んでゆくところに、人間として生れてきた意義と生きてゆくよろこびがあるのだ。

相田みつを

「父の弁当」

小1の秋に母親が男作って家を出ていき、俺は親父の飯で育てられた。当時は親父の下手くそな料理が嫌でたまらず、また母親が突然いなくなった寂しさもあいまって、俺は飯のたびに

癩癩をおこして大泣きしたり、喚いたり、ひどい時には焦げた卵焼きを親父に投げつけたりなんて事もあった。

翌年、小2の春にあった遠足の弁当もやっぱり親父の手作り。俺は嫌でたまらず、一口も食べずにちよつとずつわけてもらったおかずと、持っていたお菓子のみで腹を満たした。弁当の中身は道に捨ててしまった。

家に帰って、空の弁当箱を親父に渡すと、親父は俺が全部食べたんだと思い、涙目になりながら俺の頭をぐりぐりと撫で、「全部食ったか、えらいな！ありがとなあ！」と本当に嬉しそうな声と顔で言った。俺は本当の事なんて勿論言えなかった。でも、その後の家庭訪問の時に、担任の先生が俺が遠足で弁当を捨てていた事を親父に言ったわけ。親父は相当なショックを受けて、でも先生が帰った後も俺に対して、怒鳴ったりはせずただ項垂れていた。さすがに罪悪感を覚えた俺は、気まずさもあってその夜、早々と布団にもぐりこんだ。でも、なかなか眠れず、やっぱり親父に謝ろうと思い親父の所に戻ろうとした。

流しの所の電気がついていたので、皿でも洗ってんのかなと思って覗いたら、親父が読みすぎたせいか、ボロボロになった料理の本と遠足の時に持ってた弁当箱を見ながら泣いていた。で、俺はその時ようやく自分がとんでもない事をしたんだって事を自覚した。でも初めて見る泣いてる親父の姿にびびってしまい、謝ろうにもなかなか踏み出せない。結局俺はまた布団に戻って、そんで心の中で親父に何回も謝りながら泣いた。

翌朝、弁当の事や今までの事を謝った俺の頭を親父は、またぐりぐりと撫でてくれて、俺はそれ以来親父の作った飯を残す事は無くなった。

親父は去年死んだ。病院で息を引き取る間際、悲しいのと寂しいのとで、頭が混乱しつつ涙と鼻水流しながら、「色々ありがとな、飯もありがとな、卵焼きありがとな、ほうれん草のアレとかすげえ美味かった」とか何とか言った俺に対し、親父はもう声も出せない状態だったものの、微かに笑いつつ頷いてくれた。弁当の事とか色々思い出すたび、切なくて申し訳なくて泣きたくなる。

作者不明

お金や物がいくらあっても、

足りないと思っている人には幸福は来ません。

少ないけれども

これだけで十分と言える人は幸せですよ。

だから幸福とは物ではなく、

自分のいる環境を幸せと感ずることなんです

日野原重明（聖路加国際病院理事長）

私がまだ十代のころのことです。サーカスの入場券を買うために、父と私は長い列に並んで順番を待っていました。ようやく、私たちの前にいるのは、あと一家族だけとなりました。私はその家族に強く心を引かれました。

その家族には子どもが8人もいて、いちばん年上の子どもでも12歳ぐらいにしか見えません。あまり裕福そうではなく、着ている服も上等とはいえませんが、きれいに洗濯されています。そして、行儀よく手をつないで、両親の後ろにきちんと二列に並んでいました。期待に胸をはずませた子どもたちは、ピエロのこと、象のこと、そして今から見るいろいろな演技のことを、嬉しそうに話していました。どうやら、サーカスを見るのはこれが初めてのようです。子どもたちにとって、今日のサーカスは生涯残る素晴らしい思い出となることでしょう。

子どもたちの前には、両親がとても誇らしげに立っていました。妻は夫の手をしっかりと握って夫を見上げ、夫も暖かいほほ笑みを浮かべて、妻を見つめ返していました。売場の女性が、入場券の枚数をたずねました。父親は胸を張って答えます。

「子ども8枚と大人2枚ください。これで家族にサーカスを見せてやれますよ」

入場券の合計金額が告げられました。すると、妻は夫の手を離し、黙ってうつむいてしまいました。夫のくちびるも震えています。彼は、また聞き返しました。

「いくらですって？」

売場の女性は、もう一度答えました。その父親には、それだけのお金がなかったのです。サーカスを見るにはお金が足りないということを、後ろにいる8人の子どもたちに、どうやって告げようというのでしょうか。

ことのなりゆきを見ていた私の父は、ズボンのポケットに手を入れました。そして20ドル札を取り出し、なにげなく落としました。父は腰をかがめてそのお札を拾い上げ、その前の男の肩を軽くたたいて、こう言いました。

「失礼ですが、ポケットからこれが落ちましたよ」

その男は、わたしの父が何をしようとしているのか、すぐに察しました。彼は人からほどこしを受けるような人ではなかったかもしれません。でも、その時は、私の父の助けを心から感謝して受け取ったのです。

20ドル札を差し出す父の手を両手でかたく握りしめ、その目をじっと見つめました。くちびるは震え、ほおには涙が伝わり落ちていきます。

「ありがとう。ありがとうございます。これで助かります」

父と私は車に戻ると、そのまま家に帰りました。その晩、私たちはサーカスを見ることはできませんでした。でも、それでよかったのです。

「こころのチキンスープ」 ダイヤモンド社より

のび太君はテストの前日、ママが大事にしていた“プラチナの指輪”をなくしてしまいました。「これからママにたっぷり叱られることを思うと、とても勉強できない」とドラえもん泣きつきます。ドラえもんはポケットから「なくし物とりよせ機」を出しました。ハッキリとなくした物の形を思い出せば、それが出てくるという道具です。なくした指輪を取り返したの

び太君に、勉強をするよう話すドラえもんですが、のび太君は今までなくした物を全部取り寄せました。ママに捨てられたマンガや、ジャイアンに取り上げられた模型飛行機、谷へ落としたムギワラ帽子などをはじめとして、様々なものを出していきます。昔を懐かしむのび太君に、ドラえもんは言います。「過ぎた日をなつかしむのもいいけどね、もっと未来へ目を向けなくちゃ。ふりかえってばかりいないで、前を見て進まなくちゃ」

しかしのび太君は、

「どうせろくな未来じゃないさ。頭も悪いし、何やっても失敗ばかり・・・ずっと子どものままでいたいな」

と言り返し、ドラえもんも呆れて部屋を出ていきます。

その時のび太君は、取り出した物の中にあった小さなダルマを見つけました。それは、亡くなったおばあちゃんが昔、幼いのび太君にくれたものでした。庭で転んで泣いていたのび太君を、そのダルマを使って慰めてくれたおばあちゃん。

「のびちゃん。ダルマさんはえらいね。なんべん転んでも、泣かないで起きるものね。のびちゃんも、ダルマさんみたいになってくれると嬉しいな。転んでも転んでも一人でおつきできる強い子になってくれると・・・、おばあちゃん、とっても安心なんだけどな」

当時のび太君はおばあちゃんに、「ぼくダルマになる」と約束しています。

今は亡きおばあちゃんとの最後の思い出に頬を濡らしたのび太君は、やがて立ちあがり、机に向かって勉強を始めます。

「ぼく一人で起きるよ。これからも、何度も何度もころぶだろうけど・・・。必ず起きるから安心してね、おばあちゃん」

「ドラえもん」 てんとう虫コミックス第18巻より

時間銀行のお話

次のような銀行があると、考えてみましょう。その銀行は、毎朝あなたの口座へ 86,400 ドルを振り込んでくれます。同時に、その口座の残高は毎日ゼロになります。つまり、86,400 ドルの中で、あなたがその日に使い切らなかった金額はすべて消されてしまいます。あなただったらどうしますか？

もちろん、毎日 86,400 ドル全額を引き出しますよね。私たちは一人一人が同じような銀行を持っています。それは時間です。毎朝、あなたに 86,400 秒が与えられます。毎晩、あなたが上手く使い切らなかった時間は消されてしまいます。それは、翌日に繰り越されません。それは貸し越しできません。毎日、あなたの為に新しい口座が開かれます。そして、毎晩、その日の残りは燃やされてしまいます。もし、あなたがその日の預金を全て使い切らなければ、あなたはそれを失ったこととなります。過去にさかのぼることはできません。あなたは今日与えられた預金の中から今を生きないといけません。だから、与えられた時間に最大限の投資をしましょう。そして、そこから健康、幸せ、成功のために最大の物を引き出しましょう。時計の針は走り続けてます。今日という日に最大限の物を作り出しましょう。

1年の価値を理解するには、落第した学生に聞いてみるというでしょう。

1ヶ月の価値を理解するには、未熟児を産んだ母親に聞いてみるというでしょう。

1週間の価値を理解するには、週間新聞の編集者に聞いてみるというでしょう。

1時間の価値を理解するには、待ち合わせをしている恋人たちに聞いてみるというでしょう。

1分の価値を理解するには、電車をちょうど乗り過ぎた人に聞いてみるというでしょう。

1秒の価値を理解するには、たった今、事故を避けることができた人に聞いてみるというでしょう。

10分の1秒の価値を理解するためには、オリンピックで銀メダルに終わってしまった人に聞いてみるというでしょう。

だから、あなたの持っている一瞬一瞬を大切にしましょう。そして、あなたはその時を誰か特別な人と過ごしているのだったら、十分に大切にしましょう。その人は、あなたの時間を使うのに十分ふさわしい人でしょうから。そして、時は誰も待ってくれないことを覚えましょう。昨日は、もう過ぎ去ってしまいました。明日は、まだわからないのです。今日は、与えられるものです。だから、英語では今をプレゼント(=present)と言います。

作者不明

日本航空の国際線「客室乗務員」の話

15年働いているベテランの方

この方、経営者や、政治家、プロスポーツ選手など、これまでに多くの方と一緒にフライトをしてきたんですが、「私は普通のサービスをしてきたので、特別心に残る事はありません」と、言った後 しばらくの間を空けて、少し涙目になりながら、

「たった一回、自分で考えて、素晴らしいサービスをしたかな～って事があります」

成田発のカナダ（バンクーバー）行きのフライトの、ビジネスクラスでの出来事です。

飛行機が上昇して行く中、一人の中年男性が、ジーっと腕を組みながら、不安そうな、悲しそうな、とにかく複雑な顔をして、窓の外を眺めていたそうです。この客室乗務員さんは、（きっと商売の事を考えて、不安があるのかな～、それとも、家族を残して単身赴任で行く事に寂しさを感じているのかな～）と思い、後で食事やドリンクを出す時に、少しでも明るくなって頂きたく、（よし、お名前と呼ぼう！）と、乗客名簿を見たんです。そしたらなんと、**Mr. & Mrs.**（ミスター&ミセス）つまり、夫婦のお名前になっていたんです！（奥さんも一緒なんだ・・・、それなら観光か何かかな～・・・でも、奥さんの姿が見えないなあ～・・・）上昇中の飛行機で、まだベルトも外してはイケナイ状況、トイレに行っているのだろうか？と、走ってその席に向かいます。「“奥さんどこに行かれたんですか？”って、聴こうとした瞬間に、声が出ませんでした・・・」

横の座席に、シートベルトをした、黒いリボンのしてある【遺影】が置いてあったんです・・・

はっ！として、聞いてはイケナイと思ったけど、「綺麗な奥様ですね。如何されたのですか？」って、聞いてしまったと。

そしたら、

「実は、結婚30周年で・・・初めて海外旅行に連れてってあげようと思っていたんです。しかし、突然1ヶ月前に脳内出血で亡くなってしまったんです・・・旅行自体をやめようと思ったんですが、息子達が、“待ち望んでいた旅行をやめると、お母さんが悲しむから一緒に連れてってあげて”と

さらに、“横の座席に知らない人が座ったら、お母さんがやきもちを焼くよ”と

それを旅行会社の人に相談したら、涙を流しながら、“その座席は奥様の座席です、奥様との思い出の品でも何でも置いて下さい”って

それで、一番子供達の好きだったお母さんの写真を引き伸ばして額に入れて、シートベルトをして、飛び立った時に、“お前の待ち望んだ海外旅行だぞ”って、語りかけたんだけど・・・返事がかえってこなくて・・・」 そんな心境だったんです。

この方に、何をしてあげる事ができるのかな？って考えたそうです！機長に相談したら、「そこに奥様がいると思って接して下さい」と

奥様の好きな赤ワインを出し、料理も全て、温めて出し、その飛行機内にあった全てのお花を集めて奥様の【遺影】の前に

「今日からどうぞ、奥様と素晴らしい旅をして下さい」と、手をあわせた瞬間・・・飛行機全体に響く声で、泣きだされてしまった・・・その後もずーっと泣いていて、飛行機を降りる時も泣きながら、「本当にありがとう」と言って、飛行機を降りていった後ろ姿は、一生忘れる事は出来ない

「南蔵院住職」林 覚乗さんの講演CDより

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました

ひとつめのお話は、“本当に大切なものはお金で買えない”事を知ってはいたのですが、実感できてないことを知らされるものでした。二つ目は、一番身近なコミュニティである夫婦のあり方を考えさせられるものでした。3番目のお話は、由来を知ることによって想いを感じられるものだと思いました。4番目は、あたりまえと思っている事は、実は奇跡の連続なんだということを知りました。5番目は無償の愛というのはこのようなことなんだと気づくきっかけになったお話です。

この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961
広島県福山市明神町2丁目9-25
株式会社くるま生活
代表取締役社長 井上康一
TEL 084-943-7123
info@kurumaseikatsu.co.jp
第2回作成 2013年6月15日
コピー大歓迎。何部でもお届けします。